

# イタリア紀行

その1

2006年8月12日(土)～8月19日(土)



フィレンツェ・ミケランジェロの丘にて

## <シャルル・ドゴール空港>

パリ、シャルル・ドゴール空港はコロンの香りがした。成田発10:00のJALは11時間のフライトを終えパリで乗り継ぎをする。落ち着いた色調の空港。目を見張るようなお洒落な人々が行き交っている。

私たち夫婦は、初めてのツアーを経験している。総員26人、ベテラン女性添乗員(通称カジさん)が頼もしい存在である。ロスアンゼルスから同行予定の娘夫婦は、イギリスのテロ未遂事件の影響を受け、ロンドン・ヒースロー空港で足止めである。しかし、ホテルを手配してもらいロンドンの街を歩いたらしい。



私は、日野原先生ご愛用のオーデコロン「パコ・ラバンヌ」を免税店で手に入れた。ベニス行きのエールフランスが出発するまでの数時間、フランスの空気を胸いっぱい吸いこむ。

## <ベニス>

ベニスの夜は雨であった。漆黒の闇の中を水上バスでホテルへ向かう。狭い水路・ライトに浮かび上がる壮麗な邸宅。午後8時30分、船着き場の運河側入口からスターホテル・スプレンドィッド・スイスに到着する。ベニスのホテルの多くは、道路側と運河側のふたつのフロントを持つという。ロビーでは、すでに1日目のベニス観光を終えた娘夫婦が出迎えてくれた。

運河に面した部屋からは、雨の音が微かに聞こえてくる。長旅の疲れを温かい風呂に浸かって癒し、ベッドに横になる。気持ちが高ぶっているのであろう、なかなか寝付くことはできない。遠くで汽笛を聞いたような気がする。

浅い眠りから覚めて深い緑色の窓を開けると、運河に月光が映っている。たゆたう時の流れに身を任せていると、風景が少しずつ実態を伴ってくる。窓を開けておばあさんが洗濯物を干している。窓には赤い花が美しい。運河の色は深い緑である。「迷宮都市」・「アドリア海の女王」の夜が明けようとしている。



## 闇つつむヴェニスの運河に月揺れて迷宮都市は静かに眠る

### サン・マルコ広場

歩いて数分のサン・マルコ広場に向かう。迷路のような狭い道を抜けると突然視界が開ける。

そして、私と妻は、今までに経験したこともない感動に打たれる。天を突くように高くそびえる鐘楼が立っている。9世紀に建立されたというサン・マルコ寺院のビザンチン風の豪華さに圧倒される。眩しいばかりの金箔やモザイク装飾が眼前に迫ってくる。未だかつて遭遇したことのない文化を突きつけられた思いがする。広場の両サイドには、意匠を凝らした柱廊が並んでいる。サン・マルコ広場は、堂々たる回廊の形式をとっているのである。私たちの影が長く海にまで続いている。水際には二本の円柱が立っており、右の円柱には聖マルコを象徴する翼のある獅子が乗っている。かつて、この二本の円柱の間にロープを渡し、公開処刑が行われたという。

海の向こうには、貴婦人のように美しいサン・ジョルジュ・マッジョーレ教会が聳えている。



人影のない早朝のサン・マルコ広場

突然鐘の音が鳴り響き、私たちは、狭くてうす暗いメルチェリア（小間物通り）を通してホテルへと向かう。

朝食を摂った後、初のツアー体験である。お盆のこの時期に集まった26人は、私たちの年代を中心にして、多士済々である。お互い、何者なのかと興味はあるのだが、そのことを聞く人は誰もいない。旅が終わるまでこの軽やかな関係は続いたのである。



## 溜息の橋

ドゥカーレ宮殿はヴェネツィア共和国総督の政庁として建てられた。壮大な「大評議の間」が圧巻であるが、最も印象が深かったのは「溜息の橋」である。

ドゥカーレ宮殿には地下牢獄があり、満水時には水牢になったという。この橋を渡ると、2度とはこの世に戻っては来られず、公開処刑の人たちもこの橋を渡った。橋の小窓からは、ベニスの美しい町並みと青い

### 「溜息の橋」の小窓

海が見える。数知れぬ人々が我が身の運命を嘆きつつ、深い溜息をついたのであろう。冷たく暗い石畳を踏みながら、私も眩しい光が一条差し込む小窓からベニスの海を眺め、思わず溜息をついてみた。

昼食は「イカスミのパスタ」であった。イタリアの食事はすべて美味しかったが、この「イカスミのパスタ」が最高であった。新鮮な海の幸に対して畏敬の念を抱きながら料理するコックの姿が想像された。アメリカとオーストラリアには失礼だが、「食」に対する繊細な文化がここには息づいてると感じた。

## 地下牢に続く冷たき石畳「ため息橋」よりアドリア海見ゆ

### ゴンドラ

「セレナーデ付き、ゴンドラ運河めぐり」である。ベニスには自動車が存在しない。交通手段は、人間の歩く力と水上交通だけである。猥雑な音がこの街にはない。路上では、歌を歌う人、アコーディオンを弾く人、パントマイムをする人が所々にいて、それが風景にとけ込んでいる。人々の会話が音楽のように聞こえてくる。車文明から隔絶された「水上の迷宮都市」なのである。

娘夫婦と私たち4人は黒塗りの軽快なゴンドラに乗り込む。セレナーデを歌う中年の歌手が私たちの前のゴンドラに乗っている。「オ・ソレ・ミヨ」帰れ、ソレントへ「サンタ・ルチア」…。迷路のような運河の流れに身をゆだねながら、朗々たる歌声に心も弾む。世界中から集まった人々が運河沿いの小道を歩いている。橋から私たちを覗きながら手を振る子どもたちの笑顔が輝いている。

運河に沿って整然と有機的に、水面から直接建物が立ち上がっている。十三世紀に建てられた住宅建築が現代に息づいている。時間の感覚を喪失した眩惑の世界に誘われる。歴史的な建物の中では現代を象徴するレストランが大盛況である。歴史と現代が対話をして、至福の空間を作りだしている。

若くてハンサムな漕ぎ手（ゴンドリエーレ）は巧みにゴンドラを操り、揺られ揺られて1時間、運河の旅は終わりを告げる。



## ふたたび、サン・マルコ広場

サン・マルコ広場は、高潮の時に冠水する。しかし、人々は何もなかったように、むしろそれを楽しむかのようにカメラに収めたり、談笑しながらコーヒーを飲んでいる。子供たちは、



水遊びに大はしゃぎである。ベニスの地盤沈下は収まっているようだ。しかし、地球温暖化による海面の上昇をもろに受けるのもベニスの現実であり、この水上都市が永遠に世界の宝として輝き続けることを願うばかりである。

### サン・マルコ広場にて

も美しいといわれる広場は、至福の時間を与えてくれた。

人の波にもまれながら、私はベニスの思い出を買い求めた。まず、広場の北側の旧行政館の2階で買った真紅のベネチアグラスである。金箔の上に白い花が鮮やかだ。狭い路地で見つけた専門店を求めた、ブルーノ島の女性が代々受け継いできたという手作りレース。楕円形が珍しく、迷うこともなかった。そして、ベニスのカルネヴァーレ（カーニバル）で人々が扮装用に使う仮面。青色に金銀の装飾が美しい。

### リアルト橋

幾重にも折れ曲がる狭い目抜き通りを、人の波に揉まれながら進むと、リアルト橋に到着する。小規模ながらも高級店が建ち並び、すれ違う人々と肩が触れ合う道幅しかない。スリが横行するとのことで、私たちはバッグを腹の前に、両手でしっかりと持って歩く。

リアルト橋は、ベニスの街を逆S字形に貫く大運河のまさに真ん中に位置している。橋の上立つと、運河を行き交う水上バス・水上タクシー・無数のゴンドラが眺められる。そして美しく豪壮な商館が兩岸に立ち並んでいる。この大パノラマを見ていると、かつて栄華を極めたベニスの凱旋門としての役割を実感した。

一夜明けて、5時起床。深夜、激しい雷と豪雨がいったというが、全く知らないほど深い眠りに落ちていた。妻と私は、ホテルから歩いて5分のサン・マルコ広場に別れを告げに出かけた。深閑とした広場には誰もいない。ふと見上げると、回廊の上から虹が立っている。みるみるうちに、虹は七色を鮮明に見せて、広場全体に渡っていった。この荘厳な景色に立ち会うことのできた奇跡に感謝してベニスを後にしたのである。



リアルト橋からの風景

海はるか虹たち渡り声あげぬ被昇天の朝サン・マルコ広場に